

論考

地域が教育を支え、 教育が地域を支える



柏まちなかカレッジ学長／柏市議会議員 山下 洋輔



柏まちなかカレッジでの風景

① 地域・社会で支える教育の流れ

社会の変化は、激しさを増しています。貧困、情報化、グローバル化、価値の多様化など、子どもを取り巻く環境も大きく変化しています。学校は複雑に絡み合った課題を抱えるようになりました。学校や家庭だけで教育を支えられるものではなく、地域や社会全体で子どもを育てていくことが求められています。

学力は、子ども自身の責任だけでなく、家庭や地域などの背景にも目を向けなければなりません。同様に、いじめや児童虐待についても、家庭の問題だけではなく、経済や社会情勢と密接にかかわっています。

今、コミュニティ・スクール、部活動から総合型地域スポーツクラブ、放課後や土曜日の学習支援、スクール・ソーシャルワーカー、孤食を防ぐ子ども食堂など、さまざまな政策が展開されています。これらは、これまで学校や家庭が抱えていたものを、地域や社会で支えていくこうという政策です。

② 教育と社会

「理想の教育を考えるために、理想の社

会像を考えなければならない」と、大学の授業で教わりました。教育は社会を支え、社会は教育を支えています。

私は高校の教員でした。より良い学校を実現するには、生徒の家庭環境、地域の治安、経済状況など、学校を取り巻く社会を変えなければならないと痛感し、30歳を前に教員を辞め、大学院で研究しながら、地域に出て活動を始めました。その後、市議会議員に立候補し、今、議会や地域の活動から、教育に働きかけています。

議員や地域の活動をとおして、教育の鍵は「多様性」だと考えるようになりました。

一人ひとりの良さが生きる社会をめざし、一人ひとりに合った教育を実現させたい。野球にたとえるなら、ホームランを打つ選手ばかりではなく、バント職人や経験のあるベテランなど、さまざまな個性が混ざっているチームを育てたいと思います。

社会は、ますます複雑になり、一人で生きていくことはできません。価値観は多様になります。従来の常識は通じません。障がいのある人も、高齢者も子どもも、生まれた国違う人も、富める人も貧しい人も、それぞれの個性を認め合い、協働する。そのためには「対

話の力」が必要だと、私は考えます。

③ 教育格差と教育機会の保障

「多様性」が教育の鍵と示したのは、教育格差の現状を考えているからです。戦後の日本は、どの地域に住んでいても、一定レベルの教育を受けられるよう教育機会を保障しようと努力してきました。学習指導要領により内容が定められ、国が教育にかかる費用を負担してきました。しかし、2000年前後の構造改革の結果、教育機会の保障は崩れています。所得格差も広がっています。

貧困の連鎖を断つためにも、無料の宿題塾や放課後教室、子どもたちの生活の質を高めるための福祉的なサポートをするスクール・ソーシャルワーカーなど、行政の対策が必要です。

親の経済的な背景（収入など）や文化的な背景（学歴や知的な習慣）のほかに、「地域と

のつながり」が、学力に影響しているという報告が注目を集めています。親の収入や学歴は、簡単に変えることはできませんが、「地域とのつながり」なら改善できるという希望があります。

人口減少も、教育機会を考えるうえで、大きな問題です。現在の制度では、子どもの数が減れば、学級数は減り、学校が減っていくことになります。廃校になれば、遠くの学校まで通わなければならず、地域とのつながりも希薄になってしまいます。学校が地域の核となり、地域が学校をサポートしていく体制が求められています。

④ より良い教育のために、私にできること

「一人ひとりの良さが生きる社会をめざし、一人ひとりに合った教育を実現させたい」というのが私の教育目標です。教育基本法では、「民主的で文化的な国家の発展と世

界の平和と人類の福祉の向上」と示されています。これらの理想を実現するため、私は、できるところから働きかけています。

私は、高校で教諭を勤めた経験があり、大学院に進学して教育学を研究し、今、市議会議員として地域の声を聴き、教育行政に働きかけています。また、教育をテーマにした議員のネットワークをつくり、地方議会から日本の教育をより良くしようという教育政策のシンクタンクである(社)教育共創研究所も主宰しています。

学校や教育行政ばかりが教育ではありません。地域では、柏まちなかカレッジ学長として、いつまでも学び続ける姿勢を持つための生涯学習の活動を続け、6年目になります。

子どもの声に耳を傾けている風景



刑務所から出てきた方への更生保護の活動や学童保育の手伝い、地域スポーツのクラブ運営、自然環境や史跡の保全などにも取り組んでいます。

学校を支える地域のネットワークやより良い教育環境を整えていくことが、今できることと考えて活動しています。

マスコミと一緒にになって教育現場や教育委員会を批判するのではなく、現場の状況を調査して発信し、建設的な話し合いができる土壤を培っていくことも、私の役目と考えています。

学校は地域の力を必要としています。地域の方々には、まずは、土曜授業や放課後学習支援、通学路の安全サポートや防犯パトロー

ルなど、できるところから参加してもらいたいです。教育現場にかかわることで、評論家ではなく、「市民」として教育を支えることになるからです。

5 シチズンシップ教育の実践

私は、民間の学童保育で、子ども哲学の実践であるストーリーテリングという教育プログラムを毎月実施しています。人の話を聞くときにはおしゃべりし、人前で発表するときにはモジモジと黙ってしまう子どもたちが多いなか、人前でしっかりと自分の意見を発表できるようになることが目標です。

そのためには、人の話を聞く姿勢が大切です。聞き手は自分の意見を受け止めてくれるという安心感のある話し合いの場となるよう心掛けています。

これまで「iPadの使い方」など子どもたち自身のルールづくりや、子どもたちが考える「理想の学校」、嘘をつくこと、動物の権利、環境問題などについて話し合いました。

子どもたちにとっては、他者の意見を聞き、自分の意見を主張する練習や、他者や社会とのかかわりを考える機会となっています。いわゆる市民教育やシチズンシップ教育の実践であり、民主主義の基礎をつくるための営みもあります。

私にとっては、当事者となる子どもの意見を聞くことができる貴重な機会となっています。

市の事業は子どものためのものも多いですが、子育て支援や教育ですら、親や学校の意

見は取り入れられるものの、子ども自身の考えは反映されにくい仕組みとなっています。

また、防犯や道路まちづくりなど、子どもの視点だからこそ気づかされることも多くあります。私は積極的に子どもの意見を聞き、議会活動に取り入れられるようにしています。

小学校に招かれ、地域活性化の計画をお聞きする機会もありました。素直で、すばらしいアイデアがたくさんありました。大人と同様に要望も多かったので、財政の話やだれもが納得できるような税金の使い方などの説明をすることで、子どもたちのアイデアがさらに深りました。

お聞きしたアイデアのなかから、いくつかを私の議会質問にも取り入れました。子どもたちの考えが、政策にも反映され得ることを実感してもらい、積極的な社会参加を促し、市民としての資質をはぐくんでいくことをめざしています。

6 民主主義の拠点としての公民館

公民館は、英語では、“community learning center”ですが、文字どおりに解釈すると、“civic center”。つまり、民主主義の拠点となる施設だと、私は考えています。そこで、本来の公民館の役割を考えるうえで参考にしたいのが、フューチャーセンターです。

フューチャーセンターとは、複雑に絡み合った問題を対話によってほぐし、組織を横断したプロジェクトが生まれるきっかけをつくり、長期にわたって多様なステークホルダー



食のフューチャーセンターでの対話風景

が組織や立場を越えて智慧を持ち寄って社会課題を解決していく社会装置のような場です。欧州のフューチャーセンターでは、複数の省庁や民間企業の担当者、市民が分け隔てなく議論をし、認識を共有して革新的な政策コンセプトを立案しています。

課題発見やアイデアを出すだけではなく、多様な市民が集まり、自分たちで課題を解決していく行動をおこせないかと模索していたときに出会ったのが、フューチャーセンターでした。

私の住む柏には、地域を盛り上げようと活動している団体や人がたくさんいる反面、それらはバラバラでした。おののの活動の主体性や多様性を保ちつつ、協働していくのか考えしていました。

そこで生まれたのが、「食でつながる社会」というテーマでした。柏市は、農業が盛んで、市内では豊富な種類の農産物がつくられており、さらに、直売所や朝市、収穫祭や飲食店

を巻き込んだイベント等も多く催されていました。農業者だけでなくさまざまなジャンルの人々が活動しています。農業、飲食、流通、小売り、子育て、教育、自然環境、エンターテイメントなど、幅広い分野にまたがり、そしてだれしもが生きるうえでかかわっているのが「食」だったのです。

人と人、人と社会、人と自然、過去と未来、組織、世代、離れてしまったさまざまな要素をつなげていきたい、食をとおして、未来に、地域に働きかけたいという思いから、私たちは「食のフューチャーセンター」を立ち上げました。センターといっても建物があるわけではありません。まちの空間を活用しながら、人が集まる場をデザインしました。

「話し合いをしたって、何も変わらない」「そんなことは、今まで何度もやってきた」「フューチャーセンターって、海外ではうまくいったかもしれないが、ここは日本だから、そんな簡単ではない」

世間では、そんな声を耳にしました。しかし、柏の食にかかわる方々が一同に集うこと、話は進んでいきました。私たち運営チームも、事前に設計したプログラムに従い、当日もメンバーの対話を深めていくようファシリテートし、プロジェクトが続くようマネジメントしています。参加し、体感してみると、できるという実感がわいてくる。この実感をくり返すなかで、諦めるのではなく、社会に働きかけていこうと動く人が増えてきました。

閉塞した社会では、何をやっても無力を感じるかもしれません。しかし、小さな力でも、無力ではありません。同じ思いを持つ人が集まれば、社会を変えられます。そんな希望が連鎖し、本当に社会を変えていきます。思いを発信する場、思いがつながっていく場を、創造してきました。

公民館と言うと施設を思い浮かべてしまします。しかし、このフューチャーセンターのように、地域課題を自分たちで解決していくプロジェクトを支援し、民主的な社会を支える市民を育していくことこそが、本来の公民館の役割と言えるのではないでしょうか。

7 地域をつくる教育実践

イタリアのレッジョ・エミリア市では、20世紀最先端の教育理論と発達理論を研究し、それらをバランスよく組み立て、地域特性に合わせた教育を、公教育で実現させました。その幼児教育局主事は、以下のように語っています。

「子どもをめぐる政策が、子どもをめぐる政策だけにとどまることは決してなく、人々の現在の生活の質、未来の生活の質、そして未来の可能性と密接にかかわるものである」

教育実践には、社会的運営と参加が大切です。学校内だけではなく、親や地域・社会をどう巻き込むか、他者への心遣いが、新たな心遣いを生むのです。公共のスペースに対する心遣いが、地域社会への参加へつながります。

成功している教育実践は、地域コミュニティを築き、豊かな地域社会を実現させています。教育制度の改革が地方主権を推し進める、と言われるのはそのためです。

教育は、社会や人々の未来にとって、堅実な投資なのです。

Profile

山下 洋輔（やました ようすけ）

柏まちなかカレッジ学長。柏市議会議員。

元高校教諭。学校教育だけでは解決できない課題に直面し、議会から地域から働きかけてきた。「教育のまち」をめざし奮闘中。

1978年4月生まれ。千葉県立東葛飾高校卒業。早稲田大学教育学部卒。同大学院修士課程修了後、土浦日大高校にて教諭。早稲田大学大学院教育学研究科博士課程を単位取得後退学。

草の根からの教育改革をめざす地方議員ネットワークである一般社団法人 教育共創研究所 代表理事。教育コンサルタント山下洋輔事務所 代表。